

北斎と絵手本Ⅰ——橘守国『絵本写宝袋』からの影響

秋田 達也

はじめに

本紀要の第十六号に、「北斎と鳥羽絵本」という小論を著した^①。その「おわりに」において、北斎画に見られる橘守国や大岡春卜の絵手本からの影響について、いずれまとめて報告したい旨を記したものの、すでに三年ほどの年月が流れてしまった。なかなか執筆できなかつた理由として、特別展の準備などに追われていたこともあるが、それ以上に絵手本から北斎画への影響が多岐にわたっていることが大きな問題であった。先にまとめた名所図会や鳥羽絵本からの影響が、対象とする作品を風景画や戯画に絞りやすいのに対し^②、様々な事物が描かれた絵手本からの影響を調べるには、基本的に北斎が描いた全ての作品を対象としなければならない。北斎が七十年におよぶ画業において描いた作品は著名な錦絵シリーズばかりでなく、肉筆画・摺物・版本などまで含めると膨大なものになる。容易に想像されることだが、それらの北斎画と守国や春卜の絵手本に描かれた一図一図を比較していくことはかなりの時間と労力を要する。さらに、その結果をわかりやすく報告することは一筋縄では行

かない作業である。

そのような状況を省みて、絵手本を一種類に絞って順次報告していくのが良いのではないかと考えた。そうすることで、複雑な状況が少しは整理されると思ったからである。そこで本稿では、橘守国『絵本写宝袋』^③に絞って北斎画への影響を考察することにした。同書をどのように活用したのかを明らかにすることで、北斎の作画姿勢の一端をうかがうことができらばと思う。

一、橘守国『絵本写宝袋』について

橘守国（一六七九―一七四八）は、狩野派を学んだとされる絵師で十八世紀前半の大坂を中心に活躍した。絵手本などを多く手掛けており、それらの版本は後の絵師たちに多くの影響を与えたことが知られている^④。『絵本写宝袋』（以下『写宝袋』と称する）^⑤【図1】は守国による絵手本のうちの一つで、享保五年（一七二〇）に大坂の書肆である渋川清右衛門から出されたものである。九卷十冊からなり、一之巻から三之巻は日本の故事人物など、四之巻から七之巻は中国の故事人物など、八之巻から九之巻下には様々な禽獣が描か

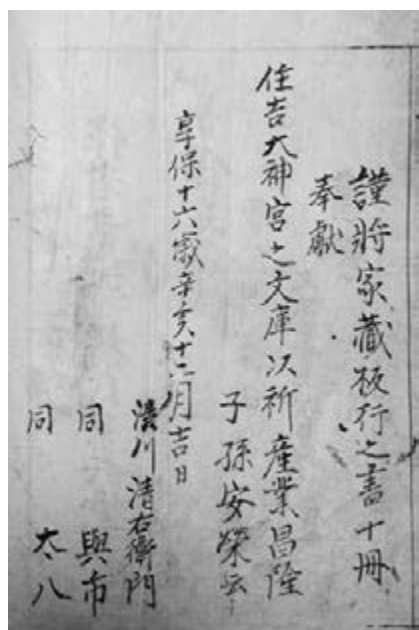


図2 橘守国『絵本写宝袋』九之巻
下（墨書） 住吉大社御文庫

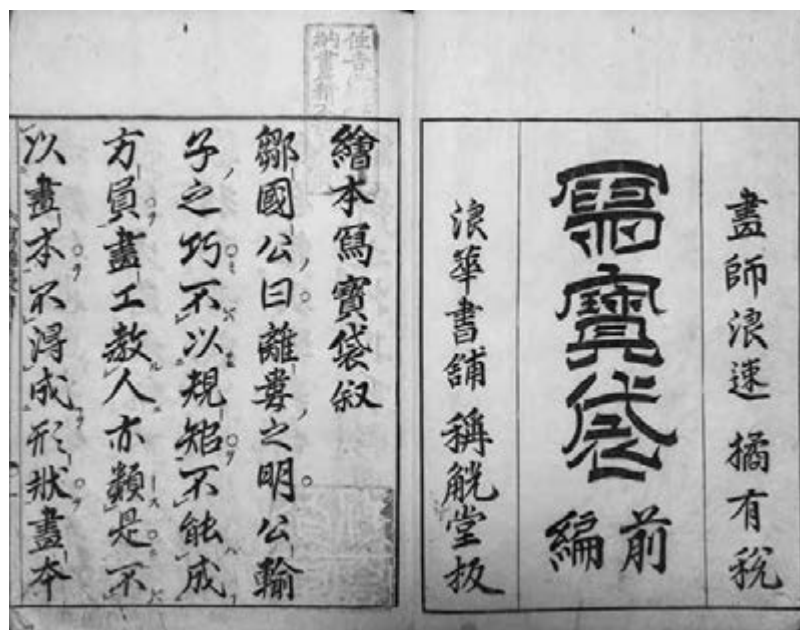


図1 橘守国『絵本写宝袋』一之巻（内題・序） 住吉大社御文庫

れている。本書が絵を描く人たちに向けた絵手本としての性格が強いものであることは、その序文からもうかがえる。

なお、本稿で使用する『写宝袋』は、住吉大社の御文庫に所蔵されるものである。住吉大社の御文庫は、享保八年（一七二三）に三都（大坂・京都・江戸）の書肆が中心となって創建されたもので、大坂最古の図書館として知られる。御文庫には書肆から刊行された版本などが奉納され、その数は五万冊におよぶという。

この住吉大社の御文庫に所蔵される『写宝袋』九之巻下の最終頁には、本書の版元である洪川清右衛門のものとと思われる墨書【図2】がある。この墨書に拠れば、享保十六年十二月に洪川清右衛門が与市・太八と連名で、「産業昌隆」と「子孫安榮」を祈って住吉大社の御文庫に奉納したものであることがわかる。『写宝袋』が刊行された享保五年から十一年後に奉納されたものではあるが、基本的に摺りはシャープであり、早い時期に摺られたものと考えられる。虫喰いなどがあるものの保存状態も比較的良好である。現存する『写宝袋』には、摩耗した版で摺られた後摺本や明和七年（一七七〇）の再版本などがしばしば見られるが、この御文庫本は刊行当初の摺りが確認できる点でとりわけ貴重なものと言える。

二、『北斎漫画』への影響

『写宝袋』から北斎画への影響として、最もわかりやすいのは『北斎漫画』である。このことについては、すでに鈴木重三氏による指摘がある。鈴木氏は、『北斎漫画』六編に描かれる「馬檻尊神」【図3】や「摩利支尊天」【図4】のほか馬具数点を描いた図【図5】が、『写宝袋』二之巻【図6・9】からの影響と考えられることを指摘し、

さらに同じ『北斎漫画』六編に描かれる馬の動態諸相も同巻からヒントを得た可能性を指摘している。

とりわけ「馬檻尊神」と「摩利支尊天」は、一見して『写宝袋』の図とよく似ており、北斎が『北斎漫画』を描くにあたって『写宝袋』を参考にしたことがよくわかる。守国と北斎が共通の祖本を参考にした可能性も考えられるものの、鈴木氏も指摘するように、『写宝袋』二之巻という一冊の絵手本から複数の影響が指摘されることは、その可能性が限りなく低いことを示している。想像を逞しくするならば、北斎が『写宝袋』を所有し、作画の際の参考に使っていた可能性を考えてもいいだろう。

ただ、ここで一つ注意しておきたいのは、『写宝袋』の馬具を描いた図が享保五年版【図8】と明和七年版【図9】で変更されている点である。『北斎漫画』【図5】と両図を比べてみると、明和七年版にしか描かれていない「押懸図」を参考にしたと思われる図が『北斎漫画』に描かれていることから、実際に北斎が参照したのは明和七年版の『写宝袋』であった可能性が高い。北斎が手に入れやすかったのは年代的にも明和七年版と考えるのが自然だろう。鈴木氏が指摘しているのも明和七年版に描かれる馬具からの影響である。ただし、本稿に用いるその他の図については、享保五年版と明和七年版で大きな違いは見られなかったもので、享保五年版を使用したことをお断りしておきたい。

以上のことを踏まえてさらに両書を比較してみると、『北斎漫画』には『写宝袋』からの影響がうかがえる図が散見される。例えば、同じ『北斎漫画』六編に描かれた「劉玄德」【図10】などはどうだろうか。『写宝袋』七之巻に描かれる図【図11】と比較してみると、



図6 橘守国『絵本写宝袋』二之巻「馬檻神之像」
住吉大社御文庫



図3 北斎『北斎漫画』六編「馬檻尊神」
島根県立美術館（永田コレクション）



図7 橘守国『絵本写宝袋』二之巻「三戦神の像」
住吉大社御文庫

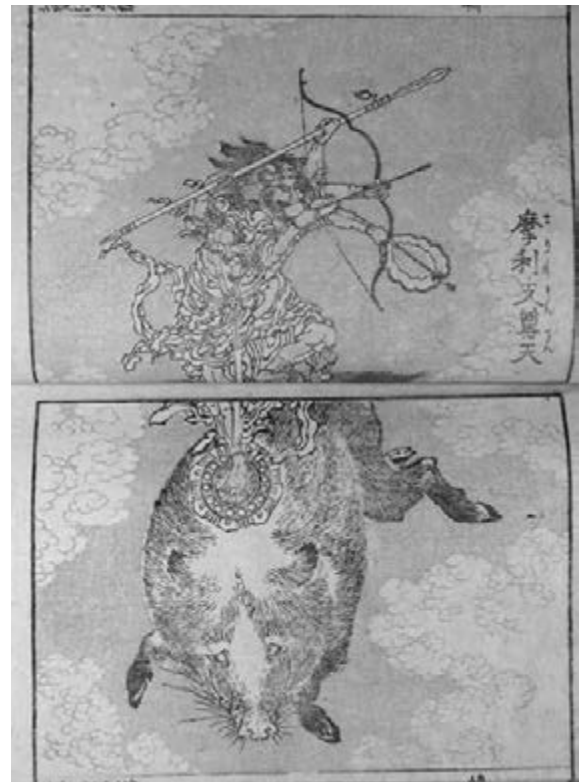


図4 北斎『北斎漫画』六編「摩利支尊天」
島根県立美術館（永田コレクション）



図8 橘守国『絵本写宝袋』二之巻（馬具）
住吉大社御文庫

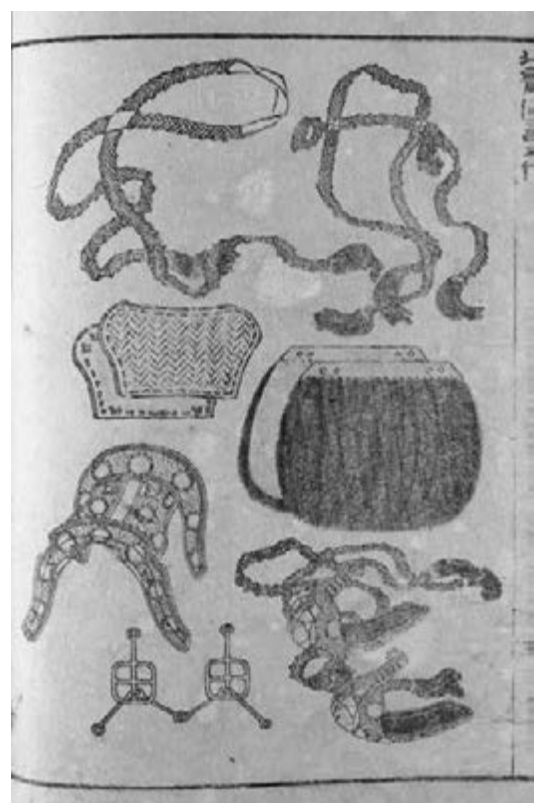


図5 北斎『北斎漫画』六編（馬具）
島根県立美術館（永田コレクション）

両図から受ける印象はだいぶ異なるものの、どちらにも劉備が黒馬に乗って激しい流れに飛び込む場面が描かれていることがわかる。これは劉備が的盧という凶馬に乗りながらも檀溪を飛び越えて難を逃れたという三国志の一場面であり、北斎は劉備と馬をクローズアップすることにより緊迫感のある場面に仕上げている。

この二図だけを比較して直接的な影響関係を指摘するのは憚られるものの、『北斎漫画』六編において「劉玄德」が「馬檻尊神」【図3】の直後に掲載されていることが、『写宝袋』からの影響を補強しているように思われる。なぜなら『写宝袋』を参考にして描かれた「馬檻尊神」と同時期に、「劉玄德」も描かれたと考えられるからである。参考までに、『北斎漫画』六編に描かれた一連の馬図の順序を確認しておくと、馬の守護神である「馬檻尊神」【図3】、凶馬に乗りつつも難を逃れた「劉玄德」【図10】、そして十頁にわたる馬の動態諸相を描いた図、さらに前掲の馬具の図【図5】の順になっている。このように、十六頁にわたる一連の馬図の中に描かれた「劉玄德」もまた、『写宝袋』を参考にしたと考えるのが自然ではないだろうか。

また、『北斎漫画』六編だけでなく、三編にも『写宝袋』を参考にしたと思われる図がある。それは「海馬^{かいば}」と「水犀^{すいさい}」の図【図12】である。「海馬」については『写宝袋』九之巻下【図13】を、「水犀」については同書の九之巻上【図14】を参考にしたものと思われる。敷き写しとまでは言えないものの、どちらもよく似た雰囲気である。ちなみに、北斎が描く「水犀」の図には三本目の角が加えられているが、この変更は『写宝袋』の画中に「三角は頂額鼻の上に在り」と説明されていることに拠っているのかもしれない。北斎が



図10 北斎『北斎漫画』六編より「劉玄德」
島根県立美術館（永田コレクション）

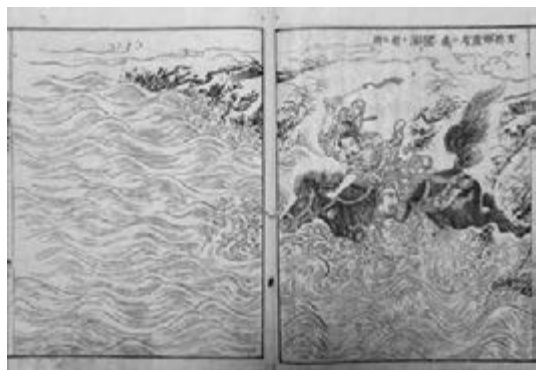


図11 橘守国『絵本写宝袋』七之巻
「玄徳的盧馬二乗り檀溪ヲ越ス所」
住吉大社御文庫



図9 橘守国『絵本写宝袋』〔明和七年版〕
二之巻（馬具）早稲田大学図書館



図13 橘守国『絵本写宝袋』九之巻下「海馬」
住吉大社御文庫



図12 北斎『北斎漫画』三編「海馬・水犀」
島根県立美術館（永田コレクション）

画中の解説にも注意を払っていた様子がうかがわれ興味深い。同じく『北斎漫画』三編に描かれる動物としては、「白鵬」【図15】なども『写宝袋』八之巻【図16】に描かれるものとよく似ている。小さな図ではあるが、両書の影響関係を示すものと言えるだろう。

その他、動物を描いたものとしては、『北斎漫画』十四編にも『写宝袋』からの影響をうかがえる図がある。例えば、「風下の獅子」【図17】などは、『写宝袋』九之巻上の「獅子狻猊」【図18】を参考にしたと考えられるのではないだろうか。獅子と牡丹の組み合わせは当然だが、たてがみを風に靡かせながらも前方を見据える表情など、『写宝袋』を参考にしたつづ北斎らしいアレンジを加えたもののよう

に思われる。また、「風下の獅子」の直前に掲載される「飛上獅子」



図14 橘守国『絵本写宝袋』九之巻上「犀」
住吉大社御文庫



図16 橘守国『絵本写宝袋』八之巻「白鷗」
住吉大社御文庫



図15 北斎『北斎漫画』三編「白鷗」
島根県立美術館（永田コレクション）



図18 橘守国『絵本写宝袋』九之巻上「獅子狻猊」
住吉大社御文庫

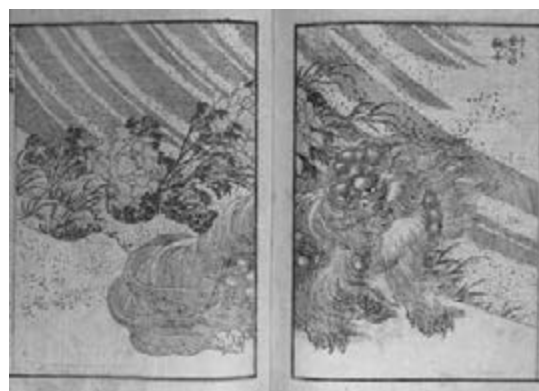


図17 北斎『北斎漫画』十四編「風下の獅子」
島根県立美術館（永田コレクション）

と、「獅子狻猊」の直後に掲載される「牡丹二飛猊」についても、影響関係が指摘できるかもしれない。描かれた獅子の姿態などは大きく異なるものの、飛び跳ねる獅子という発想や勢いのある筆触に通じるものが見られるからである。その他、『北斎漫画』の「野牛、綿羊、胡羊」「唐犬」「驢馬」なども、同じようなレベルで『写宝袋』九之巻を参考にした可能性が考えられるかもしれない⁽⁸⁾。

本章の最後に、影響関係が明らかな事例をもう一つ挙げておこう。それは『北斎漫画』十三編の「三面大黒天」【図19】と『写宝袋』二之巻「武門三天神像」【図20】である⁽⁹⁾。三面大黒天は、大黒天・毘沙門天・弁財天の三神が合体したもので、豊臣秀吉も信仰したとされる神である。両図を比べてみると、足下の俵の配置や細部の表現などは異なるものの、その他はほぼ同じ図像と言えるだろう。

ちなみに、「武門三天神像」は『写宝袋』二之巻の冒頭に描かれているもので、その次の頁には前述の「三戦神之像」【図7】が掲載されている。実物を見ることができない神々であればこそ、北斎はこのような絵手本を頼ったと言えるだろう。



図20 橘守国『絵本写宝袋』二之巻「武門三天神像」
住吉大社御文庫



図19 北斎『北斎漫画』十三編「三面大黒天」
島根県立美術館（永田コレクション）

三、肉筆画への影響

『北斎漫画』だけでなく、北斎の肉筆画の中にも『写宝袋』からの影響が考えられるものがある。その一つが為一期の肉筆美人画の優品として知られる「女三宮図」【図21】である。猫が御簾の内から飛び出したことにより女三宮と柏木が会合してしまうという、『源氏物語』の「若菜上」のよく知られたエピソードを描いたものである。縦長の画面に女三宮と猫、さらには桜が巧みに配され、禁断の恋のはじまりが華やかに描かれている。丁寧な彩色や御簾に透ける表現などからも、北斎の優れた技量をうかがうことができる。この「女三宮図」の参考になったと思われるのが、『写宝袋』一之巻の「女三宮」【図22】である。猫の首から伸びる紐をピンと伸ばしているところなど、北斎がこだわりそうなりアリティのある描写に変更されているが、女性の姿勢は左右反転しているだけでほぼ同じである。さらに『写宝袋』の「女三宮」の前の見開き（三頁前）には、北斎の女三宮とほぼ同じ姿勢の女性を描いた「女房装束之図」も掲載されている。このような二つの図を参照しながら、北斎は「女三宮図」を描いたように思われるのである¹⁰。

また、最晩年を代表する肉筆画として知られる「赤壁の曹操図」【図23】も『写宝袋』を参考にしたと考えられる作品の一つである。三国志の英雄の一人である曹操が、赤壁の戦いの前夜に槳を持って舟の上に立ち、詩をつくる場面を描いたもので、鎧の華麗な彩色や緻密な模様がとりわけ見事な作品として評価されている。この「赤壁の曹操図」の参考になったと思われるのが、『写宝袋』七之巻の同じ場面を描いた図【図24】である。北斎は、この図を参考に曹操と



図22 橘守国『絵本写宝袋』一之巻「女三宮」
住吉大社御文庫



図21 北斎「女三宮」 個人蔵

舟を左右反転させ縦長の画面に再構成しているように感じられる。遠景に描かれる南屏山や烏鵲^{うじやく}の雰囲気もよく似ている。曹操に鎧と弓を追加して武装させているところは、戦いの前夜であることを強調したい北斎の工夫なのだろう。この『写宝袋』に描かれる曹操の前の頁に、前述の劉備の図【図11】が掲載されていることも影響関係を補強しているように思われる。三国志の英雄を描こうとする最晩年の北斎の脳裏に、『写宝袋』が浮かんだとしても不思議ではない。

四、北斎が目指したもの

以上の例から、北斎が『写宝袋』を作画の参考にしていたことは明らかなことと思われる。『写宝袋』からの影響が複数、しかも異なる時期に見られることは、北斎の手に同書があったと考えるの

が自然だろう。このことは、北斎が勝川派を去った後、独立独歩の活動を展開してきたことも関係しているかもしれない。流派に属していれば、参考にすべき師や兄弟子たちの作品、さらには粉本などがあつたかもしれないが、北斎にはそのように頼れるものがなかったからである。北斎にとって刊行された絵手本が作画の参考として重要であつたことは十分に想像できることであり、版元などからの依頼により何かを描かなければならなくなった時、身近にあつた絵手本などを参考にするのは当然の成り行きだったと考えられる。

しかし、北斎はそのような絵手本をただ模倣しているわけではない。もちろん、制作の目的や状況によって様々なレベルの絵手本の利用の仕方があると考えられるが、広い視野で捉えた場合、北斎はある一つの方向性を持って絵手本を活用しているように思われる。

そのことが最もわかりやすいのは、前述の「馬檻尊神」【図3】



図23 北斎「赤壁の曹操図」
島根県立美術館（永田コレクション）

の場合だろう。この図が『写宝袋』の「馬檻神之図」【図6】を参考にしていることは一見して了解されるのだが、よく見てみると両者の間には根本的な違いがある。『写宝袋』では「馬檻神之像」と題されており、あくまで「像」として描かれているのに対し、北斎は「馬檻尊神」としてあたかも神が顕現したかのように描いているのである。このことは、『写宝袋』の馬檻神が岩座の上にいるのに対し、北斎が台座を描かずに背景に雲を描いていることから明らかにである。また、画面向かって左方向から吹く風を感じさせる馬檻神の細部の描写などからも、北斎が実在感や躍動感を表現しようとしていたことが理解されるだろう。

馬檻神ほどではないものの、「摩利支尊天」【図4】の場合にも同様のことが言える。『写宝袋』【図7】では「三戦神之像」と題されているが、北斎は「摩利支尊天」と題して、雲中に摩利支天が実際



図24 橘守国『絵本写宝袋』七之巻「曹操横槊賦詩図」
住吉大社御文庫

に現れたかのように描いている。さらに、猪の進行方向を画面向かって左から右ではなく、描くのが難しいと思われる奥から手前の方へとわざわざ変更している。この変更などは、摩利支天を流鏑馬（やぶさめ）のような体勢にすることでより現実感を出そうとしたものと考えられないだろうか。猪の進行方向と同じ方向に向かって矢を射る摩利支天の姿が、北斎にとっては不合理に感じられたように思われるのである。このような絵にリアリティーを求める北斎の感覚は、「女三宮図」【図21】の猫の紐、「赤壁の曹操図」【図23】の鎧や弓など、随所にうかがえるように思う。

このような差異にこそ、北斎が目指したものが如実に表れていると言えるのではないだろうか。北斎は絵手本を参考に行っているものの、それを決して敷き写しに描こうとはしていない。神仏、異国の動物、歴史上の人物など、主に自分の知らないものや見ることができないものなどを描く際の参考に行っているのであり、画面構成や細部の表現などを変更することで、存在感や躍動感をともなう北斎らしいリアリティーのある作品に仕上げているのである。つまり、あたかも対象が実在するかのように描いているということであり、大げさな言い方をすれば絵に魂を込めるといことになるのかもしれない。ややニュアンスは異なるが、そのような感覚は『富嶽百景』の有名な跋文にも結びつくものと言えるのではないだろうか。

（前略）七十三才にして稍禽獣虫魚の骨格草木の出生を悟し得たり、故に八十才にしては益々進み、九十才にして猶其の奥意を極め、一百歳にして正に神妙ならん歟、百有十歳にしては一点一格にして生きたるがごとくならん（後略）。

（句読点筆者）



図25 ジュール・ヴィエイヤール工房
「馬檻尊神八角皿」
ボルドー装飾芸術・デザイン美術館

ちなみに、北斎が描く「馬檻尊神」【図3】は、19世紀後半のフランスで八角皿のデザインとして用いられていることが知られている^⑪【図25】。もし、『写宝袋』がフランスに伝わっていたとしても、あくまで「像」として描かれた「馬檻神之像」【図6】がデザインとして使われることはなかっただろう。馬檻神が顕現したかのような北斎によるリアリティーのある表現こそが、国を超えて影響を与えたのである。

おわりに

以上、北斎が守国の『写宝袋』をどのように活用しているのかについて、作品に即しつつ考察を試みた。守国や春卜の絵手本が後世の絵師たちに影響を与えたことは周知の事実であり、江戸時代後期の絵師たちが版本などを参考にしているのは当たり前のことである。そして、そのような事例は枚挙に暇がないこととされ、研究上

あまり重視されていない。もちろん、似ているか似ていないかの議論に終始しては意味のないことであるが、北斎が参考にしたものを一つ一つ地道に調査し、その差異を認めて考察することは、北斎の作画姿勢、ひいては絵師としてあり方を考えるうえで、重要な意味を持つことと言えるだろう。北斎が絵手本を参考にしつつもそこから変更した点を見つめ直すことで、北斎が目指したのが見えてくるはずである。北斎が参照したものもしっかりと把握することなしに、北斎画の素晴らしさを述べているだけでは、北斎を本当の意味で理解したことにはならない。当たり前のことであっても、それを知らなくていいことにはならないのである。

冒頭で述べたように、本稿では『写宝袋』という一つの絵手本に絞って考察を試みたものの、結局は『北斎漫画』および二点の肉筆画との関係について言及しただけになってしまった。北斎画の中には、まだまだ『写宝袋』を参考にした図が多くあると思われる。例えば、北斎が最晩年に手掛けた『画本彩色通』二編の「猪」は、『写宝袋』九之巻上に描かれる「野猪」と体勢などが酷似している。『画本彩色通』が絵手本としての性格が強いものであることから、『写宝袋』からの影響が大きいと言えるだろう。やはり、絵手本と膨大な北斎画との関係を調べ尽すのはなかなか難しい作業である。本稿においても中途半端な形とならざるを得なかったが、引き続きライフワークとして続けていければと思う。

(大阪市立美術館主任学芸員)

註

- 1 拙稿「北斎と鳥羽絵本」(『大阪市立美術館紀要』一六、二〇一六年)
- 2 拙稿「北斎と名所図会」(『大阪市立美術館紀要』一四、二〇一四年)および前掲論文(註1)を参照。
- 3 守国の絵手本が後世の浮世絵師に与えた影響を考察した論考に、仲田勝之助『絵本の研究』(美術出版社、一九五〇年)、浅野秀剛「橘守国とその門流(上)」『浮世絵芸術』八二、一九八四年)、田辺昌子「鈴木春信の図柄借用」(『美術史』一二七、一九九〇年)、田中順子「守国絵本からの図柄の借用」(『実践女子大 美学美術史学』七、一九九二年)、岩切友里子「北斎「詩哥写真鏡」画題小考」(『北斎研究』四九、二〇一二年)などがある。
- 4 住吉大社御文庫本の一之巻の巻末にも同様の筆跡で「諸願成就」とある。
- 5 鈴木重三「絵本と挿絵本―その浮世絵一枚絵との交渉―」(『MUSEUM』四〇三、一九八四年)
- 6 『北斎漫画』では「櫪」としているが、本稿では便宜上「櫪」に改めた。
- 7 『北斎漫画』十四編は、北斎の遺稿を集めて嘉永二年(一八四九)頃に刊行されたと考えられるものであり、各図が描かれた年代については検討の余地がある。
- 8 動物ではないが、『写宝袋』から『北斎漫画』への影響として、『写宝袋』四之巻の「異朝帝王之像」と『北斎漫画』十二編の扉に描かれる中国風の人物との関係も興味深いと思われる。
- 9 拙稿「大坂と北斎」(『北斎―風景・美人・奇想』【展覧会図録】大阪市立美術館、二〇一二年)
- 10 鈴木春信や歌川豊国が『写宝袋』の「女三宮」の図を参考にしていることは、(註3)の田中氏の論考においても指摘されている。北斎が彼らの絵を参考にした可能性も考えられるが、『写宝袋』が手元にあったならばそれを参考にするのが自然だろう。
- 11 馬淵明子「葛飾北斎とジャポニスム」(『日本の美術三六七 北斎と葛飾派』至文堂、一九九六年)、『北斎とジャポニスム―HOKUSAIが西洋に与えた衝撃』【展覧会図録】(国立西洋美術館、二〇一七年)など。

【図版出典】

図25については、『北斎とジャポニスム―HOKUSAIが西洋に与えた衝撃』【展覧会図録】(国立西洋美術館、二〇一七年)から転載し、その他の図については各所蔵者よりご許可いただいた。

【附記】

本稿は、平成二十六～二十八年度科学研究費補助金若手研究(B)「絵手本の研究―橘守国・大岡春卜から北斎まで―」(課題番号26770038)による研究成果の一部である。また、作品調査に際しては、住吉大社の小出英詞氏、島根県立博物館の大森拓土氏に格別のご高配を賜った。ここに記して感謝の意を表します。